

## 青年期後期における娘のとらえる母親との関係性

藤田ミナ・岡本祐子

Mother-daughter relationships perceived by daughter in late adolescence

Mina Fujita and Yuko Okamoto

本研究では青年期後期の母娘関係と父母関係との関連及び青年期後期における母娘関係のタイプを検討することを目的とした。研究1では質問紙調査を行い数量的に検討し、研究2では半構造化面接を行い研究1で見出されたクラスタの特徴を発達の観点から検討した。その結果、①母娘関係と父母関係に関連が見られ、娘が父母の関係を良好と認知しているほど娘は母親に対し肯定的感情を抱いていることが明らかになり、②母娘関係のタイプとして従属群、希薄群、依存群、離反群の4群が見出された。従属群では高校卒業後に受動的な関わりが見られた。希薄群は全ての時期で相互交流が乏しかった。依存群は幼児期より母親への肯定的感情が強く、小学校から高校卒業以降に継続して受動的関わりが見られた。離反群は幼児期より母親への否定的感情が強く母親への依存が見られなかった。

キーワード：青年期、母娘関係、父母関係

### 問題と目的

#### 1. 青年期の親子関係

青年期になると、両親への精神的依存から脱却し、自己の判断と責任において行動しようとする。発達心理学では、この離脱を「心理的離乳」や「第2反抗期」などの概念で記述している。落合・佐藤(1996)は、親子関係を①抱え込む親との関係、②守る親との関係、③成長を念じる親との関係、④手を切る親との関係、⑤対等な親子関係の5段階に分類し、親子間の心理的距離の大きさの変化に注目して心理的離乳の過程を明らかにしており、青年期以降の親子関係は「親からの支配や保護を受けるといった関係」から、心理的に離乳した状態と考えられる「親との対等な関係」へと移行変わりを明らかにしている。一般的に青年期前期になると、青年は自己に強く関心を持つようになり、自己の独自性、自律性の欲求が高まるので、親と青年の間で考え方や価値観の違いから葛藤が生じやすくなる。青年期後期はこれら過去の対立・葛藤を再構築する時期であり、心理的離乳の過程において多くの場合「親との対立」や「反抗」を経て自立を遂げ、親子は程良い距離感で相互的な関係になる。Mahler(1975)は生後4カ月から3歳の間に、乳幼児が母親と未分化な存在から一つの独立した存在であると認識する過程、つまり、幼児が母親表象を内在化し、情緒的対象

恒常性を確立するまでの過程を「分離-個体化期」と呼んだ。Blos (1965) は、「分離-個体化期」を青年期に対応させた、「第2の分離-個体化期」を提唱している。「第2の分離-個体化期」とは、青年が親の影響から分離し、個人としての生き方を構築することによって、青年が親から心理的に独立する過程である。次第に青年は、同性の友人へと理想化や同一視の対象を移していき、友人関係の中で自分を知り、互いに認め合うことによって異性へのかかわりを進め、親からの心理的離乳を可能にするのである。

## 2. 母娘関係の特徴

親子間の発達の様相には男女差があり、とりわけ青年期後期の母親と娘の関係は親密で依存的であり、他の親子関係と特徴を異にしている(渡辺, 1994 など)。信田(1997)は、仲の良い母と娘を一卵性母娘と表現している。一卵性母娘とは、母親と娘が、情緒的にも経済的にも互恵的な関係を結びやすく、親密にすることでお互いに得るものがある支えあい関係である。母親と娘は双方向で得るものがあることから親密さが増すことを示唆している。渡辺(1997, 2004)は、娘の母親への依存が高校生から50代に至るまで、どの世代でも顕著に強いことを示しており、女性では親との距離の近さを保ちながら自立していくものと考えられる。

また、青年期の発達課題としてアイデンティティの獲得が挙げられる(Erikson, 1959)。橋本(2000)は、「母-息子関係では性差という生物学的な差異があり、母親は結局、息子の中に自分と違う他者を発見する。さらに息子は母の世界から出ることによって性同一性を得る。母娘関係の場合では、娘が個としてのアイデンティティを手に入れるためには母との同一化から脱出しなければならないが、娘が性同一性を確立するためには母との同一化が不可欠という難しさをはらんでいる」と述べている。斎藤(2008)は、「娘がアイデンティティを形成する上で、同性である母親との同一化は欠かせない過程である。しかし、それ以上に重要なのが差異化の過程、すなわち自分が母親とは違う存在であることに気づき、それを受け入れ、実現していく過程である。母娘関係においては、そのゆき過ぎた同一化がアイデンティティを混乱させることすらある」と述べた。したがって女子青年の場合、男子と比較して母親に対する同一化を脱することが困難であり母娘の境界が曖昧になりやすく、それゆえ、娘が主体性を見出し、心理的に分離することの困難が想定される。

## 3. 父母関係による母娘関係への影響

飛田・狩谷(1992)は、父親と母親が「仲が良い」と認知しているか否かによって娘の父に対する関係や、母親に対する関係が異なるかを検討した。その結果、父母がパートナーのことを肯定的に評価しているほど、娘も父母を肯定的に評価するようになることを示した。さらに、母親が父親を非好意的に評価していると認知することが、母親と娘のコミュニケーションや娘の母親に対する尊敬と密接に関連することが示された。飛田は、これらの結果から「母子密着」が父親に対する否定的評価を媒介として成立する可能性を示唆している。高木・柏木(2000)は、母親における夫との関係を「相互愛情・信頼」「円滑なコミュニケーション」「夫の仕事中心傾向」「コミュニケーションの不全」の側面から捉え、夫との関係が良好であるほど母親の「娘が理解者」という感情が低く、逆に関係が良好でないほど「娘が理解者」とする傾向が高まることを示している。母親が娘を自分の理解者として位置付けている背景には夫との関係において満たされないものを埋め合わせようと

する心理的な作用があることが窺える。以上より一般的に親密な母娘関係は父母の仲の良さに関連があるが、母親が娘を支えとする関係では、家庭における父親不在、夫の妻に対する情緒的サポートのなさによる母親の不満が関連していると考えられる。

#### 4. 本研究の目的

本研究では、青年期後期の母親と娘の関係性に注目して母娘関係を類型化し、各群における母娘の関係性を発達的に検討することを目的とする。また、母親にとっての娘の位置づけは父母関係に影響されることが示唆されており（高木・柏木，2000）、父母関係は母娘関係に影響を及ぼすことが考えられるため、母娘関係と娘の認知する父母関係との関連を検討することを目的とする。まず質問紙調査によって母娘関係を類型化し、それによって生じた類型ごとに面接調査を行い、その関係性の特徴について明らかにする。

### 研究 1

#### 1. 目的

女子青年に質問紙調査を実施し、母娘関係と娘の認知する父母関係の関連を検討する。さらに現代においてどのような母娘関係の関係性が存在するのかその実態を明らかにするために母娘関係を分類する。

#### 2. 方法

**調査対象者** A県下の女子大学生 340 名。調査時期は 2010 年 1 月～5 月であった。

**手続き** 講義時間終了後に質問紙を配布し、回答終了後回収した。

**質問紙の構成** ①母娘関係尺度（藤原・伊藤，2007）：「母への支え（5 項目）」「過去の対立・葛藤（6 項目）」「母の支配（9 項目）」「母への信頼（10 項目）」「母への依存（5 項目）」の 5 つの下位尺度から構成された計 35 項目に関して「全く当てはまらない」から「非常にあてはまる」の 5 件法で評定を求めた。②父母関係尺度（飛田・狩谷，1992）：子どもから見て父親と母親のあいだの関係の相互的な仲の良さについての認知を問うもので、「父親の母親に対する好意」「母親の父親への好意」「夫婦としての相互的な仲の良さ」の 3 つの下位尺度から構成された計 16 項目に関して「全く当てはまらない」から「非常にあてはまる」の 5 件法で評定を求めた。③フェイスシート：調査対象者の年齢と母親との同居の有無、家族構成、家族の年齢を尋ねた。

#### 3. 結果と考察

##### (1) 調査対象者の属性

調査対象者の平均年齢は 19.95 歳 ( $SD = 1.38$ )、調査対象者の父親の平均年齢は 51.05 歳、母親の平均年齢は 48.90 歳、父親不在の者は 16 名であった。また、母親と同居している者は 148 名、別居しているものは 185 名であった。

##### (2) 尺度の検討

**因子分析** 床効果の見られた項目（19.母のできなかつた事や夢を託そうとする，32.昔，母とほとんど口をきかない時があった）を除外し，因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った（Table 1）。その結果，先行研究（藤原・伊藤，2007）と異なる因子が抽出された。第 1 因子は，先行研究

の「母への支え」と「母への信頼」の内容が含まれる内容であった。そのため第1因子を「母への肯定的感情」と命名した。第2因子は先行研究の「母の支配」、第3因子は先行研究の「過去の対立・葛藤」、第4因子は「母への依存」とそれぞれ先行研究と同様の内容であったため、同様の因子名を採用した。藤原・伊藤（2007）によって見出された「母への支え」因子は娘が母親を支えたいという気持ちを表す項目内容から構成されており、母親との対等な立場以上に母親を支える側としての娘の意識がうかがわれ、世代交代を感じさせる領域であることが示唆されている。「母への信頼」因子は母親を信頼している娘の気持ちを表す項目内容から構成され、母親への愛着や信頼感に相当されることが示唆されている。

藤原・伊藤（2007）の研究では、調査対象者に青年期群、成人期初期群、子育て群の3群を設けており、本研究の調査対象者よりも年齢の高い者が含まれている。したがって、世代交代を感じさせる「母への支え」因子の表れ方に違いが生じたことが推察される。成人期以降では年齢の影響もあり母親への信頼感の有無に関わらず、世代交代を意識する局面が生じると思われるが、青年期後期では母を支えたいという気持ちが未だ十分に育まれておらず、母親に対する信頼感が高い者だけが他の者より早期に生じている可能性があり、「母への信頼」因子と「母への支え」因子が1つにまとまったと考えられる。これより母を支える気持ちが母への信頼感によって育まれるものであることが推察される。

**信頼性の検討** 母娘関係尺度と父母関係尺度のそれぞれの下位尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。（Table 1, 2）。十分な信頼性が得られた。

### （3）母娘関係と父母関係の関連

母娘関係尺度と父母関係尺度の関連を検討するため、Pearsonの積率相関係数を算出した（Table 3）。その結果、「母への肯定的感情」と父母関係の全ての下位尺度に正の相関が見られた。先行研究では両親が不和な場合に子どもは親との接触を避け、親との関わりをできるだけ持たないようにする傾向があることが示されている（萩原，2005）。したがって、本研究においても一般的には父母関係が良好なほど娘は母親への愛着、信頼感を築いている傾向があることが示された。菅原ら（1998）は、両親間の愛情が強いほど、両親が子どもに対して暖かい養育態度を示す傾向があることを示している。両親の関係が良好な場合では母親が暖かい養育態度をとることが推察され、そのため娘の母親への肯定的感情が高くなると考えられる。

Table 1  
 母娘関係尺度の因子分析結果

質問項目(29項目)	因子1	因子2	因子3	因子4
<b>第1因子 母への肯定的感情(<math>\alpha = .89</math>)</b>				
22.私の人生のよき理解者だ	.88	-.04	.11	.01
21.母の気持ちを理解してあげたい	.79	.15	.06	-.10
1.何かと母の支えになってあげたい	.76	.17	.01	-.09
29.なんでも話ができる	.68	-.07	.07	.03
11.私の気持ちを理解してくれる	.66	-.17	.03	.10
20.母の人生に共感を覚えるようになった	.62	.12	.10	-.12
31.母に期待されると嬉しい	.61	.19	.01	.09
7.母のようにはなりたくない	.59	-.19	-.05	-.05
25.困っていても相談する気はない*	.55	-.18	.01	.06
8.あれこれと母の世話をしてあげたい	.52	.33	-.09	.02
4.私の本当の気持ちをわかっていない*	.52	-.32	.01	-.04
35.どんな時も母に見捨てないでほしい	.50	.09	-.06	.19
26.できるだけ母のそばに住みたい(いたい)	.49	.06	-.08	.12
17.母に対して素直になれない*	.43	-.19	-.04	-.27
<b>第2因子 母の支配(<math>\alpha = .81</math>)</b>				
16.私を手放したがらない	.19	.79	-.22	-.11
3.私のことに何でも口を出したが	.06	.73	.09	.01
6.私のことを何でも知りたがる	.29	.69	-.03	.03
24.私がやるべき事にまで手を出してくる	-.01	.63	.05	.05
13.母の思うようにしないと機嫌が悪い	-.07	.63	-.02	-.03
10.自分の意見を押し付けてくる	-.13	.60	.21	-.03
33.母は、親の言うことを子ども(私)がきくのは	.01	.46	-.01	.00
28.結局、母の言うとおりになってしまうやすい	.00	.41	-.02	.32
<b>第3因子 過去の対立・葛藤(<math>\alpha = .88</math>)</b>				
9.以前は、母と言い争いが絶えなかった	.13	.01	.95	-.02
2.昔は、母とよく意見が衝突した	.08	.00	.86	.04
15.昔は、母に口答えばかりしていた	.06	-.15	.85	.15
23.昔は母と気があわなかった	-.08	.05	.68	-.14
27.昔は母がいやでしかたなかった	-.22	.06	.54	-.07
<b>第4因子 母への依存(<math>\alpha = .80</math>)</b>				
12.何かにつけ、つい頼ってしまう	.10	-.02	.01	.81
5.母に頼りすぎていると思う	-.09	.03	.07	.78
14.母に絶対に許せないと思っていることがある*	.38	-.20	-.14	-.05
30.一緒に買い物にでかけ、物をよく買ってもらう	.32	-.03	.01	.37
18.買い物で、物を選ぶのをよく手伝ってもらう	.27	.04	-.05	.30
	因子間相関	因子2	因子3	因子4
	因子1		-.35	-.47
	因子2			.51
	因子3			-.14

\*: 逆転項目

Table 2  
 父母関係尺度の $\alpha$ 係数

父親の母親への好意( $\alpha = .93$ )
母親の父親への好意( $\alpha = .95$ )
夫婦としての相互的な仲のよさ( $\alpha = .89$ )

Table 3  
母娘関係と父母関係との関連

		父母関係尺度		
		父から母への好意	母から父への好意	父と母の仲のよさ
母 娘 関 係 尺 度	母への肯定的感情	.32 **	.23 **	.24 **
	母の支配	-.05	-.04	-.04
	過去の対立・葛藤	-.12 *	-.09	-.10
	母への依存	.09	.05	.08

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

#### (4) 母娘関係の類型化

母娘関係尺度の5下位尺度を用いて、非階層法によるクラスタ分析（Ward法）を行い、クラスタの特徴を最もよく表す4クラスタを採用した。また、各クラスタの特徴を検討するために1要因分散分析を行った（Table 4）。さらに各クラスタの4下位尺度得点を標準化得点に変換した（Figure 1）。その結果、クラスタ1は、他群と比較して「母の支配」・「過去の対立・葛藤」・「母への依存」が高く、「母への肯定的感情」は中程度であった。これよりクラスタ1を「従属群」と命名した。クラスタ2は、他群と比較して「母の支配」・「過去の対立・葛藤」・「母への依存」が低く、「母への肯定的感情」は中程度であった。これよりクラスタ2を「希薄群」と命名した。クラスタ3は、他群よりも「母への肯定的感情」・「母への依存」が高く、「過去の対立・葛藤」は低く、「母の支配」は中程度であった。これよりクラスタ3を「依存群」と命名した。クラスタ4は、他群と比較して「母への肯定的感情」・「母への依存」が低く、「過去の対立・葛藤」が高く、「母の支配」は中程度であった。これよりクラスタ4を「離反群」と命名した。各群の割合は従属群・希薄群でそれぞれ22.6%、依存群42.1%、離反群12.6%であった。

「従属群」は、過去に母親への強い葛藤や対立を体験している。現在は母親が支配的に関わっており、娘もそれに服従し、且つ母親に依存的である群と考えられる。「希薄群」は、過去に母親と対立したり、葛藤を抱いたりした経験が乏しいと推察される。現在は母親の支配的な関わりは比較的に見られず、娘が母親への依存していない群と考えられる。「依存群」は、過去に母親への葛藤や母親と対立した体験が乏しい。現在の母親への信頼感、愛着は比較的に強く、母親に対して依存的な群と考えられる。「離反群」は、過去に母親への強い葛藤や、母親と対立した体験が顕著であり、母親への信頼感・依存心が乏しい群と考えられる。

各群の割合からは「依存群」に該当する者が多いことが示された。この結果は先行研究における、娘の母への依存がどの世代でも顕著に強いという見解（渡辺, 1997, 2004）を支持するものである。母親への依存は一概に自立を阻むとは言えず、女性では他者への依存と自立が青年期から成人期にかけて矛盾して存在することが示されている（福島, 1993）。渡辺（1997, 2004）は、大人には許されないという否定的な意味を前提とした他者への情緒的依存を「依存」、他者との相互理解・信頼関係に基づき他者を心の支えとできる肯定的・情緒的結びつきを「絆」と定義し、依存概念を2つに分類した。さらに、娘は母親との「依存」・「絆」が強いことを示唆し、母と娘の関係は「自立を助け合う対等な暖かい対人関係」であると述べている。しかしながら、母娘との関係が緊密であるからこそ「依存」と「絆」が分離せず、依存の否定的な意味である「もたれ合い」、「共依存」も含ま

れる可能性がある」と述べている（渡辺，1997，2004）。したがって，研究1で見出された「依存群」においてもネガティブな意味での依存関係に陥っている者も存在している可能性がある。

Table 4

各群の母娘関係の検討									
	1.従属群 (n=77)		2.希薄群 (n=77)		3.依存群 (n=143)		4.離反群 (n=43)		F(3,336) 多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
母への肯定的感情	3.44	.59	3.67	.55	3.81	.54	2.86	.78	30.39** 4<1,2<3
母の支配	3.11	.58	2.09	.59	2.52	.62	2.75	.76	35.83** 2<3,4<1
過去の対立・葛藤	3.86	.57	1.96	.58	2.08	.53	3.83	.72	257.10** 2,3<1,4
母への依存	4.29	.50	2.90	.51	4.36	.45	2.38	.68	272.67** 4<2<1,3

\*\* $p < .01$

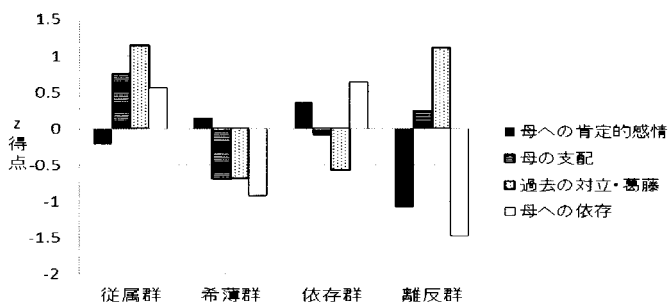


Figure 1. クラスタ分析結果

## 研究 2

### 1. 目的

研究2では個別面接調査を実施し，研究1によって分類された母娘関係が幼少期以来どのように築かれたのかを語られる生育史をもとに発達的に検討する。幼児期から青年期に至るまでに娘が母親の関わりをどう認知し，また娘が母親にどう関わっていたかという視点から母娘関係を検討し，どのような感情・思いが生じたかを明らかにする。また，研究2では，娘の認知する母親との関わりを回顧的なデータに基づき検討する。回顧的方法で捉えられる過去は現在構成されたものであり，各時期の体験そのものでないため過去の親子関係と現在の親子関係の直接的な関係を検討する上では限界があるが，「現在」という視点に基づき過去と現在の認知の関連を検討することは可能である（山岸，2000）。

### 2. 方法

**調査対象者** 研究1の調査対象者より女子大学生17名（平均年齢20.66歳，SD=1.18）。17名のプロフィールをTable5に示した。調査時期は2010年7月～11月であった。

Table 5  
対象者プロフィール

群	対象者	年齢	学年	母年齢	母職業	父年齢	父職業	きょうだい	居住形態
従属	A	22	4	53	薬剤師	60	保険外交	弟	別居
	B	21	2	53	公務員	54	公務員	兄, 弟	別居
	C	19	1	45	自営業	47	自営業	弟, 妹	別居
希薄	D	21	4	52	専業主婦	53	会社員	なし	同居
	E	21	4	49	栄養士	54	公務員	弟, 妹	別居
	F	22	4	55	専業主婦	54	会社員	姉2人	別居
	G	19	1	56	保育士	58	公務員	姉	同居
	H	24	M2	51	教師	57	会社員	弟	別居
依存	I	21	4	50	専業主婦	49	建築	なし	別居
	J	21	4	55	専業主婦	57	公務員	なし	別居
	K	22	4	49	パート	52	会社員	妹	別居
	L	19	2	48	栄養士	50代	内装	兄2人	同居
	M	22	4	49	事務	50	技師	姉, 妹	別居
	N	20	3	50	パート	51	公務員	姉, 兄	同居
	O	21	4	45	会社員	48	公務員	姉	同居
離反	P	19	2	46	パート	48	自営業	姉	同居
	Q	19	2	45	パート	死別	会社員	弟	別居

注) 学年のMは博士課程前期を示す

**手続き** 1回 50分～100分の個別の半構造化面接を実施した。面接実施前に本研究の目的、倫理的な問題の配慮について説明した。その上で、録音および筆記記録、研究結果の公表について承諾を得て、同意書に署名していただいた。なお本研究を実施するにあたり、広島大学教育学研究科倫理審査委員会の承認を得た。

**調査内容** 「幼少期から現在に至るまでのお母様とのご関係についてお聞きします」と教示した後、こちらから時期を指定し、その時期の母親との関係を自由に語ってもらった。母親との関わりについてあまり語られなかった対象者においては調査者から①母親はどのような人だったか、②どのように育てられたか、③きょうだいがいることで母親に抱いた感情、④勉強・習い事についての母親の関わり、⑤反抗期の体験、⑥進路選択、⑦一人暮らしによる母親への捉え方の変化について尋ねた。

**分析方法** ①録音記録をもとに逐語録を作成した。②母親との関わりについての語りを抽出し、エピソードは要約した。要約の総数は281個となった。③17名の各要約に初期コードを付与した。得られた初期コードを比較検討して概念の水準をそろえた上位コードを作成した。④上位コードを、ローデータを参照しながら相互比較・分類し、分類ごとに概念を命名した。データ分析の結果、母親の関わりかたへの捉え方について『上位カテゴリ』12個、<下位カテゴリ>26個を生成した。⑤信頼性を検討するため、臨床心理学を専攻する大学院生1名がカテゴリの評定を行った結果、一致率は80.17%であった。なお、分類が一致しない場合は、評定者と協議の上分類を決定した。

### 3. 結果と考察

#### (1) 母親との関わりへの捉え方

データ分析の結果、『上位カテゴリ』12個、<下位カテゴリ>26個を生成した (Table 6)。上位カテゴリの『肯定的な体験・感情』は、母親との関わりを肯定的に捉え、肯定的な感情を持っていることに関する内容である。『相互交流』は母親との会話、外出など相互的な交流、共行動に関する内容である。『否定的な感情・関わりへの不満』は、母親との関わりを否定的に捉えた内容で



Table 6  
 母娘関係の捉え方に関するカテゴリと語りの例

上位カテゴリ	下位カテゴリ	上位コード(事例)	発達段階	語りの例
肯定的な感情・体験	肯定的な感情	好意(E,H,M,P)	幼・小	(E)やっぱりすごく大好きな人でした。
		信頼(A,B,D,H,I,J,K,N)	幼・小・中・高・大	(K)いろいろやって怒りはするんですけど、最終的にはちゃんと私のことを見てくれてるっていうのがあって。ちゃんと言葉で明白に思ってたかは分からないんですけど、この人は自分を裏切らないっていうのは思っていました。
	見守られ感・安心感	安心感・分離不安(A,C,D,E,G,K,L,M,O,P,Q)	幼・小	(M)たぶん一緒にいると安心したし、いなかったら不安だったと思います。
		受容される(C,D,E,G,K,M,O)	小・中・高・大	(K)幼稚園に向かえにきてくれたりして、他の人ももちろん帰ってるんですけど、私だけ、教室に来てみたらまだ食べてるっていう場面があって、これは絶対怒られるなど思ったんですけど、『頑張って最後まで食べなさいよ』って優しく言ってくれたのとかが印象に残ってます。
		大事にされる(J,M)	幼・小	(M)まあでもすごい大事に思ってくれてると思ってたのかな。
		褒められる・認められる(K,M,N)	小・中	(M)面倒見てくれて何かした褒めてくれたり、(K)頑張った分を認めてくれたのは良かったです。ちゃんと言われたように頑張って、1ヶ月2ヶ月経ったあとに『ちゃんとできてるじゃん』ってそういう自分が頑張った分を認めるような発言をしてくれました。
		関心を持たれる(C,F,J,L)	小・中	(J)そのコンクールに出たときに大阪まで母親がついて来てくれて、でそのちゃんとコンクールでしてるのを見に来てくれたんで、それは嬉しかったですね。
		やりたいことを肯定される(C,J)	小・中	(J)そのクラブのことについては全然自由にやらなさいって感じだったし、なんかコンクールで1回大阪とか言ったんですけど、そういうのも全然『行っておいで』って言って行かせてもらったりしてんで、学校の趣味とかは自由にさせてもらえてたと思います。
		体験の共有(B,F,O)	小・中・高・大	(K)5年生の時に1年から6年が参加するリレーでアンカーを走って、それで1位をとって、それをすごい喜んでくれたのが嬉しかったです。
		サポート享受(E,O)	高・大	(O)学校が遠かったので駅まで毎朝送ってもらって、帰りは家まで送ってもらってっていうのが日課だったんですけど、すごくありがたかったです
相互交流	相互交流	会話(A,B,E,H,I,K,L,M,N,Q)	小・中・高・大	(L)話しますね。たぶんずっとしたと思うんですけど、まあ自分から「今日～があったよ」みたいなかんじて話すぐらいで。
		外出する・遊ぶ(I,L,P,Q)	幼・高・大	(Q)こっちい頃はよく本を読んでくれてたとかですかね。あとは電車でいろんなところ行ったかなぐらいですかね。
否定的な感情・関わりの不満	否定的な感情	怒ると怖い(A,B,D,E,F,I,O)	幼・小・中・高	(I)母親がずっとやっちゃダメって言ってることを繰り返したりすると、もちろん怒られて、で怒られるとなんか、叩かれるとか蹴られるとかあって。なんか怖いっていう。
		嫌悪感(G,P,Q)	小	(G)結構時間にきっちりした人なんで。あの、習い事があるときとか迎えに来てくれるんですよ。そういうときにお姉ちゃんが遊んでてすごく遅くなったりするんですよ。そういうので怒ったりするのが「ああやだな」とは思っていましたね。
		見捨てられ不安(A)	小	(A)なんかそのテストで100点を取れなかったり、ミスをするっていうことがほんとに重大な失敗のような、それは私の中でして、実際母親も100点を取れなかったときにあまりいい顔はしなかったの。失望されているかんじがしたのかもしれないです。
	関わりの不満	きょうだいを優先される(A,G,H,L)	幼・小	(L)なんか次男ばかり可愛がった気がします。ちょっとうらやましいなと思ってたんですけど。まあ私も傍にいるしつかみたくない。
		きょうだいの面倒を任せられる(K)	幼・小	(K)常に私と妹セットでさせよう。『お姉ちゃんだから妹のことよろしく』って言ってちゃんと妹の面倒を見るように育てようとしてたようです。私としては、面倒くさい。また？友達の家遊びに行くのにも、あれ妹も来ちゃったんだけど。あれ？え？とか思って。でほんとに怒られるし。
		理不尽な対応(E,F,H,L,N,P)	小・中	(L)寝る場所の居間にいたらお母さん酔っ払ってるんで、なんでか知らないんですけど、私に八つ当たりして、何度か、なんで八つ当たりされるのか理由が分からないんで、「うん、うん」みたいなかんじでずっと聞いてイライラしてました
		認められない(D)	小	(D)小学校とかで、もうちょっと褒めてほしかったなっていう思いはあるんです。『頑張ったね、すごかったね』と言われるよりは、『もっと頑張れんさい』と言われたことのほうが多い気がして。たぶんそれがちょっと不満なのが微妙にあった気がするんですよ。
		共感不全(L,Q)	中・大	(L)1回学校行きたくないって言ったんですけど、なぜか逆に怒られました。『学校行きたくないんだけど』って言った。『なんで？』みたいなかんじで最初は普通に聞いてたんですけど、あまりにも長つたらしくて、うんうんうんずうしてたせいで母親が怒ってしまっ。て。(笑)しょうがない、怒ったうちのせいだし、まあ我慢して行こうかみたいな
	愛情欲求	関わりの稀薄さ(B,F,N,O,P)	幼・小・中	(K)どっかかというとやっぱり最初の子どもの姉のほうが、こう気にかけてみたいで、で私立中に行かせて、まあいろいろあったんだとは思ってますけど。あまり私には構ってくれなくて寂しかった。関わってくれたらくれたで嬉しい。
		寂しさ(L)	高	(L)なんか時々実家へちょっとだけ寄って、帰るときがあるんですよ。その時に帰っていくときに、なんか寂しいなみたいなかんじはしました。
守母を	—	—(L)	幼	(L)母親と一緒に寝るときにお父さんが酔っ払って帰って来て、隣にいる母親蹴飛ばしてしまって、でびっくりして、母親に抱きついて泣いてましたんですけど、離れたらまた蹴られるんじゃないかな、みたいな。かんじがしたんで、母に抱きついてました。

Table 6 続き

主体の抑制	顔色を窺う	顔色をうかがう(B,I,J,K,L,P)	幼・小・中・高	(G)すごく厳しいいんですよ、うちの親。だからあのあんまし駄々をこねたりはしなかったと思います。いい子だったと思います。たぶん、嫌われたくないっていうのが大きいのかなって。
	遠慮(G,P)	遠慮(G,P)	幼・小	(P)ディズニーランドに普行ったんですけど、そのとき飛行機で行って、すごい高い料金なんだろうなってずっと思ってたんですよ。なので園内のお菓子とかすごく高くて、あんまりねだれなかったです。ずっと見てたらその視線に気づいてくれて買ってくれた思い出があります。
	気遣い	気遣い(D,F,J)	中・大	(D)一応相談はいことはしたのはいしたけど、やっぱり心配かけられない？みたいな。
	の自立へ の躊躇	自立への躊躇(J,K)	大	(K)いろんな周りの状況を考えて上で私が就活とかして働くんだしたら、この家のメンバーの近くにいないとまずいかなと思って、それで戻ろうと思いました。
受動的関わり	受け入れられる	呑み込まれ(G,H,I,J,K,M)	幼・小	(J)通った幼稚園が割と勉強熱心というか、結構勉強させられて、で小学校も地元の小学校じゃなくて国立の附属の小学校に入ったので勉強をずっとさせられてましたね。当時は幼稚園の環境もあって、周りもみんな勉強してたからこれが当たり前だと思ってやってた
	同一化(M)	同一化(M)	幼・中・大	(M)なんか影響を受けやすかったと思います。お母さんが『ああいうの嫌だ』って言ったならなんか自分も嫌になったりとか。お母さんが『おいしい』って言ったならおいしい気がしてました。
	従母に	従う(C,E,L)	小・中・高・大	(L)『じゃあ地元の学校にしなさい』うん、そうする』みたいな。なんかしばらく経って、あれ、なんでここ選んだんだろみたいな。
母からの分離	自立・反発	煩わしい(A,D,E,F,G,I,O,P,Q)	幼・小・中・高・大	(A)やはりしつつけが厳しいではないですけど、もともとそれはしつつけだったんだと思うんですけど、だんだんその、管理されているような気持ちになってきて、母親に。だからそれが非常にうとううなくなってき時期だったと思います。
		反抗(A,B,D,M,N,P)	幼・小・中	(A)普通に、言われたこと何でも、母親父親に言われたことに何でもこう、反発したいって感じですね。何とかしなさいにはとやまず反抗。
		距離をとる(A,D,G,H)	中・高	(H)あんまり話さなかつたりとか、あとリビングにほとんどいないようにするとか。ご飯食べる時以外はいないとか。
		恥ずかしい(B,C,O)	中	(B)1年生のときに親と一緒にソフトバレーをしたんですけど、そのときにお母さんがやたらと張り切ってきて、その時に『ほんとにやめてほしい』って思ってた、『出てこんで』って思ってた思い出があります。もうやめてみたいな。恥ずかしかったです。
		突き放す(F)	高・大	(F)『今までそんなこと言ってなかったじゃん』っていう風に言ったこともあります。結構な頻度で『今までそんなこと言ってなかったよ』っていう風に突き放してたような気がします。
	親を見切る	反抗への諦め(F,G)	中	(G)性格って変わらないじゃないですか、考え方もその人が生きてきてそういう風に思ったわけだから、そう変えられるものじゃないって思ったら、(反抗は)まいいかみたいな。
		軽蔑(A)	中	(A)こう生活に追われてるかんじがあって母親や父親には、で、えっと人生であるとか、もっと哲学的なことを考えるのが高尚だと思っていて、私はその時は、そういうことを考えていないようにどうも見えたので、アホだという風に感じてた気がします。
		価値観の相違(A)	中	(A)お情けで大会に出られることがあったんですけど、そのことに対して母親から『そういう風に結果が出ないものだったらやめてしまいなさい』っていう風に言われて、それが全然私の価値観とは逆だったので、そこでちょっとケンカになった記憶がありますね。私の考えてることと全く逆を行く人だなという風に、合わないなって思ってたんですけど。
	主体性を 見出す	割り切る(F)	高	(F)2番目の姉は夏休みはほぼこっちに帰ってきたりとかして、そうしたら昔と変わってないっていう、いつもは私1人だけ姉が帰ってきたら、また姉に向かって行くっていうので、あ、またかと思って、もう仕方ないなと。言っても状況は変わらないので、あ、もういいやと。割り切らないといけなくなって。
		主張する(C,H)	小・高	(H)『私も休んでいいかな、～ちゃんのお母さんいって言うてるし』って思ってた休んだらものすごく怒られてっていう覚えは。その時は～ちゃんのお母さんは行かなくていいって言ったとかいろいろ言い訳はした
		主体性(I,J,N,P,Q)	中・高・大	(Q)そのときから、教育で研究者になろうと思ってたので、だからそのためには大学行かって決めて、だからもう商業系じゃなくて進学校行きますみたいな。で決めました。
		客観的に見る(A,D,K,M)	中・大	(K)そこは私も甘えてたけど母もちょっと私たちに対して甘いのかなと思いましたが、もっと突き放してもいいんじゃないの？って。
対等な関係	母親も1人の人間であると気づく	マイナス面への気づき(G,K,L,P)	中・大	(K)でも相談してきたことに向こうが迷ってる様子を見せたんで、それは今までのいろんな問題にアドバイスくれた母でも迷うような微妙な問題もあるのかっていうことがわかったので、それが1番印象に残ってます。
		1人の人間としての母(A,I)	中・大	(A)考えることがちよっと違うって思うようになって、別の人間なんだから言うこと聞かなくていいし、何でも反発する必要はないんだと思って。それまでは母親と自分をほぼ一種のようものだと思ってたけど、私とお母さんは別々の人間だという風に思った
		イメージの変化(H)	中・高	(H)今まではすごいしっかりしててっていうイメージがあったけど、それがちよっとそういう面だけじゃないんだって、しっかり真面目っていうのがちよっと薄れたというか、歳を重ねて丸くなったみたいなどころがあって、そんな堅い人ではないんだっていう。
		感謝(A,B,C,D,O,G,N)	高・大	(N)自分という人間を豊かにしてくれたんじゃないかなって。こうやって育てられたから今の自分があるんじゃないかなって感じさせてくれた親だったなって。
		共感する(H,I)	高	(H)その反抗期でたぶん私が反抗したのがその不満に対する反抗だったから、なんだ(母も)同じことしてるんだって感じ。
		反面教師(I)	高	(I)父親と昔のことで未だにネチネチ言ったりして、なんで未だにあのときのことネチネチ言ってるんだろうって思ってた、だから私は絶対あんな執念深いというか、いつまでもネチネチするようなことを考えたくないなとか、ああいうふうには振る舞いたくないなとか、思っていました。
		尊敬(A,F,G,J,F,M,O)	大	(O)大学生になって自分も洗濯とか家事をやるようになったんですけど、もう結構しんどくて、でもお母さんは毎日それを何回も何回もやってすごいなとは思いました。
		個を尊重したい(I)	大	(I)未だに母親は母親としか見れなくて私のわがままで振り回したりするんですけど、なんかできるだけもうちょっと個人を尊重していけるようになったらなっていう。

Table 6 続き

	対等な関係	対等な関係 (A,K,N)	中・高・大	(A)私の言ったことに対してとか反発に対して、『私は1人の人間としてこう思う』っていうような対応の仕方をしてくれるようになってきたので、母親と娘っていう関係よりもなんか人間としての関係になったというか。すごく上手いことやってくれたなっていう風に思います。上手く反抗から自立につながってくれたんじゃないかっていう風に思っています。
		意思を尊重される (A,H,I,J,K,M,O,P)	中・高・大	(M)だんだん自分の責任でやれていることになったんですね。自由度が上がった気がします。
		母に意見する (G,Q)	中・大	(G)いやな気分になるんで、もうやめて。まあおばあちゃん地味に癖のある人なので。わかるけどでもそんなね。ほんとに子どもにいうことじゃないだろうって。
母を労う	哀れむ なし訳 す心る配	哀れむ(Q)	中	(Q)その時期からすごい、逆に見てたらこの人ほんとに可愛そうな人生だなんて思いました。
		申し訳なし(I)	大	(I)結構なんか私が大学に来てから自分の時間がほしいって言い出すようになったんですよ。これまで母親の個人としての部分をあまり尊重できなくてなんかすきなことを、たぶん趣味があるのになんかそれをさせてあげる場所を作らず、もう私が母親を独占してたところがあったんで、申し訳ないっていうか。
		心配する(D)	大	(D)やっぱりお母さんがちょっとまあ、ガンで手術で入院して、その時がすごく心配だったというか。結構、手術もなんですよけど、検査がしんどいみたいで、そのとき結構しんどそうなお母さん見ると「わー」ってちょっと心配になりましたね。
母を支える	情緒的 支え 物理的 支え	愚痴を聞く・相談される (B,G,D,E,H,K,L,O)	小・中・高・大	(L)あ、そうなんだ、父さんそうなんだみたいな。母親から悪い話を聞かされたら、ちょっとずつ父親のアレが下がっていくというか。そんなかんじでした。
		支える(L,O)	大	(L)母親が『いつも電気切ってくれてありがとね』って。なんか立場逆になってるよね、みたいな。
		老後の支援 (B,M,N)	大	(N)老後の管理は私がすると思います。だから昔は介護士さん目指してたんですよ。
母への依存	情緒的 依存 子どもの 世話	相談する (C,D,E,G, K,L,M,O)	小・中・高・大	(G)結構お母さんには悩みを相談してたんで、中学校はやっぱり荒れるじゃないですか、でその分なんかすごい腹が立ったとかこういうことがあったとか、結構愚痴は言っていましたね。
		子どもの世話期待(B,K)	大	(B)まあ私が大人になって結婚して子ども産んだら、まあ子どもを預ける場所ですよ
不安離	—	— (I,M)	大	(I)無条件に頼れる存在だっけと認識して、これからも無条件に頼っていい人だし、まず間違いない嫌われることがないすごい頼みたい人だったんで、その人が傍にいないってなるといざとなったときにどうすればいいんだろうみたいなそういう不安が強いんだと思います。

注1)発達段階の幼は幼児期、小は小学校時代、中は中学校時代、高は高校時代、大は高校卒業以降を示す

注2)下位カテゴリ、上位コードの—は、上位カテゴリと同様の内容であることを示す

ある。『母を守る』は、母親から守られるはずである幼児期に、娘が母親を守ろうとした関わりに関する内容である。このカテゴリはLにのみ見られた。『主体の抑制』は、娘が母親を気にして自分の欲求や主張を抑えることに関する内容である。『受動的関わり』は、母親の要求通りに振る舞うことに関する内容である。このカテゴリは、母親と未分化で母親の言ったことに疑問なく従っている<呑み込まれ>、<同一化>と自分の考えを持ちつつ母親の意見に従ってしまう<従う>から成る。

『母からの分離』は、娘が母親の関わりを煩わしいと感じたり、母親に依存するのではなく自ら主体性を見出し自己決定したりした内容である。『対等な関係』は、中学生以降から出現するカテゴリで、娘の成長するにつれて母親イメージが変化したり、母親を母親としてではなく1人の人間として捉えることが可能になったり、対等な立場に立って改めて母親と尊敬したり、母親に共感したり、自分のために母親が個の部分犠牲にしてきたことに気づき、母親の個の側面を尊重したいと考えたりすることに関する内容である。

『母を労う』は、母親をこれまでの母親への関わり方に<申し訳なさ>を感じたり、母親の体調を<心配>したり、母親の人生を哀れんだりと母親を想うことに関する内容である。『母への支え』は、娘が母親を情緒面で支えたり、老後の面倒を見ることを決意したりすることに関する内容である。

『母への依存』は、母親に相談するなど情緒的な依存と、娘自身が結婚し子どもが生まれたときに母親に面倒を看てもらいたい気持ちに関する内容である。『分離不安』は、高校卒業以降に見られるカテゴリで、娘が青年期後期に差し掛かっているにも関わらず、母親と物理的に離れることに不安

を感じる体験に関する内容であり、母子未分離が想定されるカテゴリである。

## (2) 各群における母親との関わりへの捉え方

群ごとに出現した上位カテゴリを発達段階別に整理した (Table 7)。4 群に共通した上位カテゴリとして、幼児期、小学校時代には『肯定的感情・体験』と『否定的感情・関わりへの不満』が見られた。中学校時代には、『否定的感情・関わりへの不満』、『母からの分離』、『対等な関係』が見られた。高校時代には、『母からの分離』、『対等な関係』が見られた。高校卒業以降は『相互交流』、『母からの分離』、『母への支え』が見られた。

以上より、幼児期・小学校時代では娘は母親との関わりから肯定的な感情を抱いたり、母親との関わりに対して肯定的体験と捉えたりする一方で、母親に対して否定的な感情を抱いたり、母親の関わりに不満を持ったりするといった両価的な捉え方をしていると考えられる。そして中学校時代からは、母親の関わりに対して煩わしさや、恥ずかしさを感じ母親に反抗・反発したり、これまで絶対的だった母親の関わりに対して疑問を抱き、母親を客観視したりできるようになる。さらに、母親を母親としてではなく、1人の人間として認知できるようになり、母親の個の側面に気づくようになる。中学校時代は、母親への反抗的な態度から距離をとり、相互交流が見られないが、高校卒業時代になると反抗的な感情も落ち着き母親との相互交流が見られるようになる。また母親を支えるようになり、母親と娘が同等、あるいは立場が逆転する場面も見られるようになる。以上の経過は青年期における心理的離乳の課程とも対応していると考えられる。

従属群は、幼児期より『母からの分離』が出現している。高校卒業以降において『受動的関わり』が出現し、『母を労う』はすべての時期を通して見られない。従属群では、幼児期より『母からの分離』が出現していることから、母親からの早期分離がうかがわれる。A は幼児期より母親の干渉的に「煩わしさを感じていた」と述べている。また高校卒業以降において『受動的関わり』が出現しており、母親の干渉、支配的な関わりが強さが推察される。C は高校卒業以降、自分の予定があっても母親から強引に用事を頼まれると渋々要求に従っていた。

希薄群では、幼児期から高校時代に至るまで『相互交流』が出現していない。また『母を労う』の出現率が低く、母親を想いやる気持ちは乏しいと考えられる。全ての対象者が過去に葛藤や対立を経験しており、また、母親を支える気持ち、母親に依存することも語られており、研究1で示した群の特徴と異なる特徴が得られた。これに関し、質問紙の「過去の対立・葛藤」を測る項目から得られる反抗期、葛藤のイメージと実際に母親に対して経験した反抗的体験に差異があったことが考えられる。また、「過去の対立・葛藤」の項目が母親への否定的な印象につながり、回答が歪んだ可能性がある。

依存群では、『肯定的な感情・体験』の出現率が高い。また幼児期から現在までを通して『相互交流』が出現している。『母への依存』が中学校時代から高校卒業以降まで継続して見られているのも特徴である。一方で、『母を守る (幼児期)』が唯一出現しており、幼児期における母親と娘の役割の逆転が窺われた。『受動的関わり』も幼児期から高校卒業以降まで継続して出現している。さらに、『分離不安 (高校卒業以降)』が見られた。依存群では、他群と比較し『肯定的な体験・感情』の出現率が高く、母親へ肯定的な感情が強いと考えられる。また幼児期から現在までを通して『相互交

流』が出現しており、関わりの頻度も他群より多いと考えられる。

さらに、『母への依存』が中学校時代から高校卒業以降まで継続して見られているのも特徴である。『母からの分離』、『対等な関係』が出現していることから依存群の多くが心理的離乳の過程を辿っていると考えられる。一方で、『母を守る』が唯一出現しており、幼児期に母親と娘の役割の逆転が見られた事例も存在した。『受動的関わり』も幼児期から高校卒業以降まで継続して出現しており、母親の影響力の強さが推察される。さらに、『分離不安』が見られ、青年期後期においても母子未分離な面を有していることが推察された。これに関し、母親は娘に対して親しいあまり、娘との境界が曖昧になり、結果として娘の人生に支配的に関与する可能性もある（信田，1997）こと、母に喜ばれるようにと振舞うあまり、気がつく自分自身の人生を生きている実感が得られない、また、母抜きで恋愛・結婚をして幸せになることに罪悪感を抱いてしまうというような、娘において母から自由になれない（高木・柏木，2000）といった共依存的な関係性が存在することが示唆されている。

例えばLは、幼児期より父親に暴力を振るわれている母親を守ろうとするなど、本来母親に守られるべき時期に役割が逆転し母親を守るという経験をしている。また小学校、中学校では、飲酒した母親に八つ当たりされる体験をしている。しかし、このような理不尽な対応にも関わらずLは母親からの愛情を希求しており、自ら母親に接近していた。高校、大学進学への進路決定においてもLが自分の希望を主張するも結局母親の意向通りに決定し、高校卒業以降は、母親の傍で母親を物理的にも精神的にも支えている。Lの事例からは、母親への信頼が強い者の中に母娘の役割が逆転した「母親を支える娘」が存在することが示唆された。また、Kは大学進学で実家から離れたことで、過干渉な祖母と距離ができて楽になったものの、母親のことを案じ、自分だけが楽になった申し訳なさを感じている。結局就職の際には、母を想い実家に戻ることを決意している。Kの事例からは、母親を残して自分だけが幸せになることに罪悪感を抱き、自らを犠牲にして母親を守ろうとする娘の様態が窺われた。

離反群では、母親との関わりの語りの少ないことが特徴であった。『肯定的な体験・感情』が中学校時代以降見られない。また『否定的な感情・関わりへの不満』が高校卒業以降も出現している。『母からの分離』が幼児期より出現しており、さらに『母への依存』は幼児期から高校卒業以降を通して出現していない。離反群では、『母からの分離』が幼児期より出現しており、早期分離がうかがわれる。『母への依存』は幼児期から高校卒業以降を通して出現していない。離反群のP、Qはどちらも幼児期から高校時代にかけて「怒られた記憶しかない」と語っており、母親からの見守られ感や受容的な関わりが希薄であったと考えられる。したがって母親への否定的感情や関わりへの不満がつわり、母親への煩わしさ、母親の関わりに対する諦めの気持ちが生じ、母親との早期分離に至ったと考えられる。そのため、娘の側から母親への接近欲求は乏しくなり、母親への依存も見られなくなったと考えられる。

### (3) 母娘関係と父母関係との関連

父母関係についての語りは具体的に語られなかったため、事例を基に検討する。多くの対象者が、自分の父母関係を漠然としか捉えられておらず、「仲はよかった」「よくもなく悪くもなく」など曖昧な回答が多かった。しかし、父母関係が母娘関係に影響を与えていると推察される事例も存在し

た。

希薄群のEは、幼児期まで母親から受容的に関わられていたが、小学校時代に父親が単身赴任した際に母親の関わりが変化すると語った。父親の単身赴任によって子育て、祖母の世話などで母親の負担が重くなり、そのストレスの影響もあり、Eに当たるようになった。Eはこの時期の体験を否定的に捉えている。その後父親が単身赴任から戻ってくると母親の態度も元に戻ったという。

また、依存群のIの両親は、Iが小学生の頃より夫婦仲が険悪になり、Iは小学校時代より母親から父親に対する愚痴を聞かされていた。愚痴を聞くことが父親評価の低下につながり、父親に嫌悪感を抱いて距離を置いており「父親を避ける分母親に近づいていた」と語っている。同じく依存群のLは、幼児期より時折父親が母親に暴力を振るっている現場を目の当たりにしており、母親を庇おうと母親に接近している。

離反群のQの母親は、幼児期・小学校時代は学習面に厳しく、手を挙げられることも少なくなかった。しかし中学校時代に父親が亡くなり、母娘関係は大きく変化した。母親が家計のために働きだしたり、車の免許を取得したりと1人で様々なことを対処しているのを目の当たりにし、「可哀そうな人だ」と母親を哀れむ気持ちが生じている。父親の死をきっかけに母親は仕事で忙しくなり、これまでの厳しい教育方針と一変して放任されるようになった。また「母親を支えなければ」という気持ちも父親の死以降ずっと持ち続けていると語った。以上の4事例は、父母関係が母娘関係に影響を及ぼすことを示唆している。父親不在による母親の負担の増加、母親が父親から蔑ろにされ、不幸な姿を見せることが母娘関係の変化に大きく関係していることが推察された。

#### **本研究の限界と今後の課題**

本研究にはいくつか課題が残されている。青年期後期の女子を対象に母親との関係性を検討し、母娘関係と父母関係との関連を行ったが、研究1において母娘関係と精神的健康、適応力との関連を検討していないため、どの群でより精神的健康・適応力が高いのかについては検討できていない。そのため、今後母娘関係の種類と精神的健康の関連を検討することが望まれる。また研究1において娘の認知する父母関係の測定に関して仲のよさという肯定的な側面でしか検討していない。そのため、否定的な側面も含めて父母関係との関連を検討することで本研究によって示された結果とは異なる結果が示された可能性がある。

Table 7  
各群の母親との関わりの捉え方

上位カテゴリ	幼児期				小学校				中学校				高校				高校卒業以降			
	従属	希薄	依存	離反	従属	希薄	依存	離反	従属	希薄	依存	離反	従属	希薄	依存	離反	従属	希薄	依存	離反
肯定的な感情・関わり	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
相互交流			○	○			○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
否定的な感情・関わりへの不満	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○					○
母を守る			○																	
主体の抑制		○					○	○	○	○	○				○					○
受動的関わり		○	○		○	○	○				○				○		○			○
母からの分離	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
対等な関係								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
母を労う																			○	○
母を支える						○	○		○	○	○			○	○		○	○	○	○
母への依存							○			○	○		○				○	○	○	
分離不安																				○

注)網掛けは全群で共通して出現していることを表している

### 引用文献

- Blos, P. (1962). The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 162-186.
- Erikson, E. H. (1959). Identity and the life cycle. *Psychological Issues*, I (1) New York: International University Press.
- (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性——アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- 藤原あやの・伊藤裕子 (2007). 青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係 青年心理学研究, 19, 69-82.
- 福島朋子 (1993). 青年から成人にわたる自立と依存 日本発達心理学会第4回大会発表論集, 153.
- 萩原英敏 (2005). 両親の不和が子の心理的発達に及ぼす影響——青年女子の場合—— 淑徳短期大学研究紀要, 4, 29-48.
- 橋本やよい (2000). 母親の心理療法 日本評論社.
- 飛田 操・狩谷佳子 (1992). 両親の「仲のよさ」の認知と親子関係 福島大学教育学部論集, 51, 55-63.
- Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant* New York: Basic Books.
- (マラー, M. S., パイン, F & バーグマン, A. 高橋雅士・織田正美・浜畑 紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生 黎明書房)
- 信田さよこ (1997). 一卵性母娘な関係 主婦の友社.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 斎藤 環 (2008). 母は娘の人生を支配する 日本放送出版協会.
- 菅原ますみ・小泉智恵・詫摩紀子・八木下暁子・菅原健介 (1998). 夫婦関係と子どもの発達(4)——

夫婦の愛情関係と子どもの抑うつ傾向との関連—— 日本発達心理学会第9回大会発表論文集,  
359.

高木紀子・柏木恵子 (2000). 母親と娘の関係 発達研究, **15**, 79-94.

渡辺恵子 (1997). 青年期から成人期にわたる父母との心理的關係 母子研究, **18**, 23-31.

渡辺恵子 (2004). 母親と娘はなぜ親密か——青年期から成人期にかけて—— 柏木恵子・高橋恵子  
(編) 心理学とジェンダー：学習と研究のために 有斐閣, Pp.31-36.

山岸明子 (2000). 女子青年によって再構成された幼児期から現在にかけての母親との関係 青年心  
理学研究, **12**, 31-46.